「ギターと草原」

人物

田端　良太（24）大学生

西川　花織（21）バイト先の同僚

北山　童夢（23）バイト先の社員

飯田　朝日（8）男の子

○田端の部屋

８畳ほどのワンルーム。

開きっぱなしの窓からは、草が茂る空き地がみえる。

部屋には、ギターが置いてあり、机の上に手作りのチケットの余りが５０枚くらい残っている。

壁には、有名ロックバンドのポスター。

田端、届いている段ボールの中身を確認している。保存できる食料品と手紙が１通入っている。

田端、手紙を読む。

手紙の文面『留年した分の学費はいれられません。自分で頑張ってください』

田端、ギターを手に取ろうとして、やめて、ベッドに横になる。

じっと天井をみつめる田端。

ふいに、チャイムの音がする。

起きて、ドアをあけると、誰もいない。

ドアの前には、草の葉っぱが落ちている。

○空き地

草の茂る空き地の真ん中で、空を見上げて立っている飯田朝日（8）

飯田の服装は少し薄汚れている。

無表情で空をみていたが、そのままぷいっと、走り去っていく。

○居酒屋『魚や』　外観

入口には、バイト募集中の張り紙が貼ってあり、ちょっと剥がれかけている。

○同　店内

開店前の朝礼。

田端を含めたバイトの店員４名と店長の北山童夢（23）が向かい合わせで立っている。

北山「では！今日も朝礼、はじめまーす」

田端の隣に立っている、西川花織（20）が元気よく返事をする。

西川「はーい」

田端、ちょっとびっくり。
北山「今日は新しくメンバーが追加されました
あ。田端良太さんでーす」
バイトメンバーみんながぱちぱちとま
ばらに手を叩く。
西川は笑顔で手を叩いている。
北山「田端さーん、ちょっと前出てきて、挨拶
して」
田端「田端です。…よろしくお願いします」
北山「田端さんが慣れるまでみんなでフォロー
してがんばりましょう」
西川「はーい」
北山「では今日もいかせていただきます。ハイ、
いらしゃいませー」
バイト達「いらしゃいませー」
北山「ありがとうございまあーす」
バイト達「ありがとうございまーす」
北山「本日のおすすめはこちらになりまーす」
西川「（小声で）ほら、田端さんも声出して」

田端「あ…本日のおすすめはこちらになりまーす」
北山「お。田端さんいいじゃない。はいじゃあ、今日も一日、おねがいしまーす」
田端「今日も一日おねがいしまーす」
北山「田端くーん、それは言わなくていいから」
田端「あ…ハイ」
他のバイト達、くすくすと笑っている。

○同　厨房
洗い場でひとり洗浄機に食器をいれている、田端。
田端「聞いてねえよ…」
食器を下げにきた西川、田端をみて
西川「たばさーん、大丈夫？」
田端「え？あ、それ俺？」
西川「うん。あ、私はにっしーでいいよ」
田端「…にっしー」
西川「さっき、ごめんね」
田端「え？」

西川「私が、声出してなんていったから」
田端「いや、そんなの」
西川「ほんと？よかった」
西川、屈託なく笑う。
それにつられて笑う、田端。
西川「あ。てんちょーに怒られちゃう。またね」
西川、パタパタと走ってでていく。
田端、ちょっとにやにやしている。

○田端の部屋
スマホをいじりながら寝っ転がっている田端。
スマホにSNSで連絡がくる。
『生きてる？』の文字
田端「生きてるわ、バーカ」
田端、返信しようとすると、先にSNSが届く。
『こっちは、新人研修で死にそう』
田端「…」
『曲つくってるか？』

田端「‥つくってねーよ」
田端、窓を開けて、隣の空き地を眺める。
青々とした草原がひろがっている。

○居酒屋『魚や』　厨房
一人、洗浄の予洗いにおわれている田端。
ひょこっと、西川がやってくる。
西川「今日もここだ」
田端「あ‥」
西川「にっしー。おぼえて、たばさん」
田端「‥暇、なの？」
西川「ひっどーい」
田端「だって、持ち場とかあるだろ」
西川「たばさんと話したいからきたのに」
西川、洗浄用のエプロンをつけながら
西川「手伝ってあげる」
田端「いいよ」
西川「だいじょーぶ。これ得意なの」
西川、田端の隣にたって、一緒に仕事を
始める。

田端「…」
西川「うちの店って忙しいからさ、辞めちゃう
　人多いよねー」
田端「だろうね」
西川「やっぱそうだよね、あ、たばさんって、
　大学生？」
田端「まあ、そうだね」
西川「すごーい、勉強できるんだ」
田端「いや、そんな事はないかな」
西川「でも私よりできるでしょ。私、高校もで
　てないもん」
田端「え？」
西川「（明るく）家がビンボーだったんだ」
田端「…」
西川「でも、勉強きらいだったし、仕事して、
　体うごかすの好きだったし」
田端「へえ…」
西川「ほら、たばさん、ちゃんと手を動かして」
田端「あ、うん」
西川「さっさと片付けよ」

田端「にっしー・・さん」
西川「にっしーでいいよ」
田端「にっしーはやりたい事とかって・・」
西川「やりたいこと？何それ？」
田端「やりたい事っていうか、したい事でもいいけど」
西川「ゲーセンかなあ」
田端「ゲーセン？」
西川「めっちゃ可愛いヌイ(グルミ)があってね。それ私じゃとれなくって」
田端「ああ・・そういうこと」
西川「あー、バカにしてるー」
田端「してないよ。俺、とるの得意だし」
西川「え！じゃあ、いっしょにいこっ」
田端「いいけど、そっちが良ければ」
西川「やったー、デート」
西川、にこにこしながら、洗い物をつづけている。
その笑顔をみて、田端も笑う。

○道　（夜）

人気のない、住宅街。
一人、にやにやしながら歩いている田端。
田端のアパートが見えてくる。
その近くの街灯の下、飯田が立っている。
田端に気が付き、走りさる飯田。
飯田が去っていた方向は草むらがひろがっている。

○夜の闇（イメージ）

夜の草むらの中、闇雲に走っている田端。
ふと、立ち止まって下をみると、一歩先が崖になっている。
田端、後ずさりしようとしたとき、後ろに人がいることに気が付く。
顔を見ると、それはあの飯田である。

○居酒屋『魚や』　厨房

仲良く、田端と西川が並んで仕事をしている。

西川「えーそれだけで、幽霊ってわかんなくない？」
田端「だって、夜中だよ？子供がふつう夜に外なんかいないでしょ」
西川「んーでも私、でてたしなー」
田端「ええ？そうなの？！」
西川「だって家にいてもつまんなかったし」
田端「つまんない？どうして？」
西川「ママ、男できるとそっちいっちゃうんだよねえ」
田端「え？」
西川「家に連れてきた時は、出てほしかったみたいだし」
田端「男って？それお母さんの彼氏の事？」
西川「そうそう。でも、私もその方が全然らくで。触ってくるからさ、そういう男って」
田端「…」
西川「何真剣な顔してんの？頭とかだけだよ」
田端「あ…」
西川「ちょっとたばさん、今変なこと考えたで

しょ」
田端「そっか・・そうだよね」
西川「それに男の人ってそういうもんだし」
田端「・・そうかな？」
西川「（笑いながら）えーそうでしょ？」
フロアから声がする。
北山の声「西川さーん」
西川「あー見つかっちゃった」
西川、エプロンを外しながら
西川「てんちょーって、私のこと見張ってんのかな？」
西川のエプロンから、紙切れが一枚おちるが、西川は気が付かない。
北山やってきて、
北山「西川さん、場所、はなれないでって言ってるでしょ」
西川「はあーい」
西川、パタパタとフロアに戻っていく。
北山、それを見送ってから田端をみて
北山「・・田端さん、もう２４でしたっけ？」

田端「え？はい、そうですけど」
北山「俺、２３です」
田端「…はあ」
北山「大学ってそんな凄いとこなんですか」
田端「え‥」
北山「俺は高卒なんで。店長やってますけど」
田端「…」
北山「年下の店長に使われるってどうなんですかね」
田端「どうって言われても‥」
北山「（小声で）どんくせえな‥ったく」
田端「こっちだって、いろんな事情があって‥」
北山「（遮って）ったく、いい大人なんだからさ。判れよ、あんたも」
北山、そう言いのこして、去っていく。
田端「‥え？」
田端、ぽかんとしてしまうが、床に落ちている紙を拾い、それを見る。
西川と北山の似顔絵が描かれており、ハートがついている。

田端「なんだよ、これ・・」
厨房の洗浄機の音が、大きく響く。

○道　（夜）
人気のない住宅街。
田端、疲れ切った足取りで歩いている。
ふと、５０ｍほど先の街灯をみると、
ぽつんと立つ飯田を見つける。

田端「（驚いて）・・」
飯田、じっと田端をみている。

田端「誰だよ・・お前」
飯田、走り去ろうとしたので

田端「まてよ！」
田端の声をきいて、びくっと止まる飯田。
田端、少しずつ飯田に近づく。
飯田は、ぼろぼろの靴と薄汚れた服装をしている。

田端「お前、誰だよ」

飯田「…ギター」

田端「え？」

飯田「あそこでいつも弾いてた」
田端、男の子が指さす先には、田端のアパートが見える。
田端「なんでそんな事・・」
飯田「あれ、聴きたい」
田端「・・・」
飯田「かっこいいよ、あの曲」
田端「かっこいい？」
飯田「うん。がしゃがしゃって音がいいんだ」
田端「ああ・・あれな・・そっかあの曲か・・」
田端、言いながら涙がでてくる。
飯田、不思議そうに田端をみる。
飯田「痛いの？大丈夫？」
田端「なんでもない。・・ちょっと目にゴミはいってさ」
田端、飯田に笑いかける。
飯田も笑う。
月の光の下、草の茂る空き地に風が通り抜ける。

了